



人生の糧となった私の1冊

田北 十生

私は、京都橘女子学園を選択定年制適用の1年前にあたる昨年3月に退職し、現在、大津市の葛川溪谷でカフェ&ギャラリーを始めた。まったく異質な世界に身を投じたのである。選択定年の60歳で退職すると退職金が5割増しになるのであるが、なぜ選択定年の1年前に退職したかということについては、話せば長くなる(笑!)のではありません。

要するに一言で言えば、現在ではなく、未来を買ったわけです。したがって、いわゆる「ゴーストの会」に入会しないといけないのかもしれませんが、ゴーストにはなりたくない。(笑!)

自分の歩んだ道など振り返ってみる必要などない。過去は、好むと好まざるとにかかわらず、われわれにまわりついて離れない。そんな過去にことさら気を使う必要はない。過去の中で生きようとも思わない。私に必要なのは、未来である。そのために私の現在がある。かといって、私は「生」に執着しているわけでもない。いつ私に死が訪れようと、後悔もないし、未練もない。私の死の時は、生もまた私にとって過去になろうとしているからである。過去の経歴や実績を糧に生きようとは思わないのである。むしろ、未経験の世界へ踏み出してみたいのである。そして、その道を歩き始めた。

てなことで、偉そうに言ってみたが、その実は、全く偶然に誘われてこのお店を買うことになった。開店してみると、なんと結構たくさんの方がやって来た。僕の知らない世界に生きている人たちである。地元の方々も応援してくれていて、本当にうれしい。暖炉の薪がないといえば、探して運んでくれる。サルが花壇を荒らしたといって、知らないうちに手入れをしてくれる。野菜や安曇川で釣った魚を届けてくれる。よそ者の私たちにとって過分なご好意である。

(次頁へ)

[目次]

人生の糧となった私の1冊	田北 十生	…	1
2004年近畿4支部新春合同例会			
「国立国会図書館と大学図書館の新たな連携に向けて」参加記	高城 雅恵	…	3
京都支部委員『新年度の抱負』		…	5
京大図書館史こぼれ話 その七	廣庭 基介	…	7
会費納入のお願い		…	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール: dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL: <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

ギャラリーも9月から始めたが、お客さんの中から展示させてほしいという方もいて、なんとかさまになっているし、その人たちの世界に触れることもできた。傑作なのは1月12日に歌手のソニンさんが突然やってきて、無料でミニコンサートをさせてくれというのでOKした。何でもキャラバンをしてらしくて、TBSの「ぴったんこカンカン」という番組の担当者とテレビカメラも2台付いていた。わざわざ東京からご苦労さん！折角だからとコンサートの後、皆さんにコーヒーをサービスした。お世辞抜きで「おいしい〜！」とソニンさんが行ってくれたのは、正直うれしかったよ。まあ悪戦苦闘しながらも、楽しく暮らしています。

ところで、人には、自分の人生を変えた1冊というものがあると思う。僕はその1冊で目からうろこの気分になった。その1冊とは「それでも人生にイエスと言う」(Viktor Emil Frankl 著、山田邦男・松田美佳訳 春秋社)である。このタイトルはブーヘンヴァルトの歌から取ったものらしい。(…Trotzdem Ja zum Lebensagen)

大図研の皆さんも、すでにこの本はとっくの昔に読んだと思いますが、僕は、この本に出会ったとき、本当に感動しましたし、目の前が開ける思いがし、何度も何度も読み返し、ノートを取りました。

僕は小さい時から「人間はなんのために生きているのか？」ということが、ずっと心から離れませんでした。それは複雑怪奇な家庭に生まれたことが原因しているのだと思いますが、それも話せば長くなるので省略。で、「生きる」ということに意味を見出せず、「生きることは死ぬことだ」という哲学？を確立し、死への憧れを抱いて生きてきました。ところがフランクフルトは、その本の中で語ります。

”……人間性が問題であることがはっきりしたのです。すべては、その人がどういう人間であるかにかかっていることを私たちは学んだのです。最後の最後まで大切だったのは、その人がどんな人間であるか「だけ」だったのです。なんといってもそうです！ついこの間起こったどんなおぞましい出来事の中でも、そして強制収容所の体験の中でもその人がどんな人間であるかが問題でありつづけたのです。

バイエルン地方のあるところに強制収容所がありました。そこではナチスの親衛隊員である収容所所長が、ひそかに自分のポケットから定期的にお金を費やして近くにあるバイエルンの市場町の薬局で「自分の」囚人のために薬を調達していたのです。他方おなじ収容所で収容所での最年長者、つまり自分自身囚人である人間が囚人仲間をぞっとするような仕方で虐待していたのです。つまり、まさしく、人間にかかっていたのです。最後の最後まで問題でありつづけたのは、人間でした。「裸の」人間でした。”

そして彼はつづけます。

”私たちが「生きる意味があるか」と問うのは、はじめから誤っているのです。つまり、私たちは、生きる意味を問うてはならないのです。人生こそが問いを出し私たちに問いを提起しているからです。

私たちは問われている存在なのです。

私たちは人生がたえずそのときどきに出す問い「人生の問い」に答えなければならない、答えを出さなければならない存在なのです。生きること自体、問われていることにほかなりません。そして、それは生きることに責任を担うことです。

こう考えると又、恐れるものは何もありません。どのような未来もこわくありません。未来がないように見えてもこわくありません。もう現在がすべてであり、その現在は、人生が私たちに出すいつまでも新しい問いを含んでいるからです。すべてはもう、その都度、私たちにどんなことが期待されているかにかかっているのです。その際どんな未来が私たちを待ち受けているのは知るよしもありませんし、また知る必要もないのです。”(_____は田北)

これは僕にとって 180 度の発想の転換を意味しました。そしてなぜか救われた思いがしました。そして、「裸の」人間がこうも問題であり、異なるのはいったいなにが原因しているのだろうかと考え込んでしまうのです。それは、かの収容所長には、他者への思いやり、すなわち他者の自己化という精神作用があり、一方、かの囚人の最年長者には、他者の敵対化という精神作用が働いていたということではないかと思えます。後者は人との信頼や絆が結べない人たちではないでしょうか。まさにその人の人間観、世界観が「裸の」人間の生き様を物語っているように思えます。

自分の人生の意味を充足させることが生きている証でもあり、喜びでもあるということには、誰も異議はないと思えますが、それには自己の人生のためにのみ行動しても、それは得られないように思う。ある意味では自己を犠牲にしても、他者のために最善を尽くしてこそ、そうであって初めて自己の人生が意味を持ち、深い感動と喜びに満たされるのではないかと思う。なぜなら人間の絆、信頼し、いつくしみあえる絆の構築こそが人間にとってもっとも重要なことであると思うからです。そういう意味でかの囚人最年長者に代表される人たちは、不幸な人であるとしか言いようがないし、深い感動も喜びもすでに喪失してしまっている人たちであろう。

とにかく、私のささやかなお店を軸に多くの人たちと「人間のよき絆」を構築できたらとひそかに願っているのであるが、最後にフランクルがこの本の中で引用しているタゴールの詩の一節を引用して筆を止めます。

私は眠り夢見る
 生きることがよろこびだったらと
 私は目覚めて気づく
 生きることは義務だと
 私は働く -----するとごらん
 義務はよろこびだった。

たきた かずお (大図研 京都支部員)

2004 年近畿 4 支部新春合同例会

「国立国会図書館と大学図書館の新たな連携に向けて」参加記

高城 雅恵

上記例会は去る 1 月 17 日にキャンパスプラザ京都で行われた。このタイトルを見て、違和感と同時に興味を惹かれた方も多いのではないかと思う。

1. 国立国会図書館について

国立国会図書館は国内唯一の国立図書館として国立国会図書館法により昭和 23 (1948) 年に設立され、1) 国会(国会議員、国会関係者) 2) 行政及び司法の各部門(政府各省庁及び最高裁判所 3) 国民(一般利用者、公立その他の図書館、地方議会等)に対してサービスを行っている。関

西館は平成 14 (2002) 年 10 月に開館したが、それに先立ち館内で資料群別編成から機能別編成へと組織改革が行われ、関西館内に事業部一図書館協力課が設置された。これにより図書館間貸出・複写・レファレンス等の業務は各部局、図書館協力事業はこの課で行われることになった。課内には研修交流係・調査情報係・総合目録係・障害者図書館協力係があるが、本日は研修交流係長小島氏と調査情報係長竹内氏のお話を伺うことが出来た。

2. 研修協力系の業務

研修協力係は広報・研修交流の事業を担当している。広報は、HP の「図書館へのお知らせ」の編集 (http://www.ndl.go.jp/jp/library/library_news.html)、メールマガジン『図書館協力ニュース』の編集・配信 (http://www.ndl.go.jp/jp/library/library_news_toroku.html)、『図書館協力ハンドブック』(図書館間貸出・複写・レファレンスサービス等の執務用資料) の編集・刊行等を行っている。研修は、企画・折衝から実施までこの係で行われているが、図書館員向けの利用ガイダンスから、例えば古典籍や資料電子化、法令議会資料、アジア情報など国内各種図書館職員向けテーマ別研修、日本研究情報専門家研修などの海外図書館職員向けテーマ別研修、図書館情報大学の実習生や海外の図書館職員を受け入れて個別に対応した研修等々、内容は極めて多岐にわたっている。

3. 調査情報系の業務

調査情報係は、図書館研究所の業務を一部引き継ぎ、図書館及び図書館情報学に関する情報収集・調査研究とその成果の提供を業務としている。『カレントアウェアネス』(<http://www.ndl.go.jp/jp/library/current.html>)、メールマガジン『カレントアウェアネス—E』(<http://www.ndl.go.jp/jp/library/hp-cae.html>) の編集・発行はこの係である。この編集企画会議には、館内の関係部局の職員だけでなく館外の各種図書館員や図書館情報学研究者も関わっている。調査研究に関しては、現在「電子情報環境下における科学技術情報の蓄積・流通の在り方に関する調査研究」が 2 ヶ年計画で実施されており、報告書は HP でも公開される予定である。調査自体は外部調査研究機関に委託しているが、図書館情報学研究者と館内の職員を交えた研究会を設けている。

4. 両系の今後の方向

両氏とも業務が自館だけにとどまっていたと出来たものでないという明確な認識を持たれており、「今までは支援” Support”であったがこれからは協働” Partnership”へ」と主張されていたのが印象的であった。小島氏はニーズにあった研修を実施するために図書館情報学研究者や各団体との具体的な連携方法の模索と各図書館での研修事業への支援を、竹内氏は短期的には調査研究・情報発信機能の充実強化と将来的には専属研究員を置いた「研究開発センター」的組織の実現を、今後の課題として挙げられた。

5. 感想

国立国会図書館は同じ図書館でありながら、あらゆる図書館をバックアップする「図書館の図書館」であって、これまで業務の内情について積極的に公開されることはなく秘密のヴェールに包まれたイメージを個人的には持っていた。しかし今回第一線の現場で働く両氏の話をお伺いして、日本唯一の国立図書館という特性を生かした多様かつ専門的な業務が行われているということがよく分かった。特に羨ましく思ったのは、海外図書館・図書館情報学研究者との連携についてである。『カレントアウェアネス—E』は私も愛読者で、図書館を取り巻く様々な情報が盛り込まれており毎回の配信が待ち遠しい。

今回の講演会のテーマは「異館種連携」であるが、それぞれの実態は互いにまだまだ見えていないというのが現状ではないか。国立国会図書館は法律を根拠として設立されており、立法府に

属し、納本制度があるということを知ってはいても、資料収集やサービスの実際・抱える問題や館の意思決定の方法、将来戦略など、こちらが知りたい点はまだ沢山ある。こちら側大学、特に国立大学図書館の実情は、NII を頂点として「親方日の丸」的にまとまっている点が特徴と言えると思う。4月から法人化されて今後どうなるか不明ではあるが、今まで国の政策の意向を強く受けてきたしこれからもある程度はそうなるであろう。システム開発はNII が主導権を握っており、総合目録とリンクした ILL システムが稼動しているし、今後は GeNii で学術情報の統合化が進むものと思われる。それに対し公共図書館は同じ文部科学省の管轄下にあっても、あまり国(生涯学習政策局)の影響を受けず、図書館の充実度は各都道府県・市町村の教育政策によるところが大きい(この大学と公共の違いは、恐らく運営費の出所の違いによるものである)。この地方自治体ごとの差を埋めるため、日図協が様々な働きかけを行っているといったところが現状であろうか。研修についても、大学図書館は文科省や NII、国大図協、各種団体で行われているし、公共図書館については日図協や都道府県立図書館、各種団体で行われている。こうした違いを前提に、館種を越えた連携のあり方、連携を進めていく上で指針となる「日本の図書館員像についてのグランドビジョン」について、どのように考えたらいいのだろうか。

考える手掛かりを得るためにかつて在籍していた大阪府内のある市立図書館へ話を伺いに行った。その図書館では、現在相互貸借は大阪府立図書館の提供する横断検索サイトで検索・予約を行うので、利用者に本が届くまでの時間が昔と比べ格段に短くなったとのことであった。情報技術の進展と書誌情報の整備は、家に居ながらにして各図書館の所蔵情報が得られることになり、利用者にとっては直接図書館に出向くかそれとも Web 上で申し込むか選択の幅が広がることを意味する。今後各図書館は、自館が所蔵する資料の特性に基づいた、サービス対象をはっきりと意識したサービスがますます求められていくことになるだろう。大学図書館は目下遡及入力緊急の課題であるがこうした動きと無縁でいられない筈である。早急に利用者本位のサービス戦略の策定と人材育成について議論される必要がある。他館種図書館との具体的連携はその先にあり、それまではとりあえず個人レベルでの情報交換・人的交流を行っていくしかない。

参考：児玉史子。図書館協力業務の再編成。国立国会図書館月報。(508), 2003, p. 1-7

たかぎ まさえ (京都大学文学部 整理掛)

京都支部委員新年の抱負

(先月号からの続き)

赤澤久弥 (京都大学)

担当：研究企画、HPとML担当

今年国立大学にとって、「国立大学法人化」という、半世紀以上ぶりともなろう、制度上の大きな変化の年です。これから実際にどのように変わっていくのかは、現在でもなかなか見えてきません。ですが、まずは昨年の自身を振り返りつつ、近年の企業 CM コピーをお借りして、反省と思うところを三題。

「変わらなきゃも変わらなきゃ」(某自動車メーカーCM)

法人化を間近に控えても、「どうせ今までと変わらない」、「わざわざ今までのやり方を変える必要はない」と、つい思っていないか? 「変わらなきゃ」と思いながらも、これまでやってきたことをあえて変えることは、しんどいことかもしれません。そこで自分を振り返るに、「先生方が納得しない」ことや「今のやり方で間に合っている」ことを言い訳に、よりよくすることをさぼっていないか、反省するところがあります。ちなみに某自動車メーカーは、自らで変わることができず、業績悪化の果てに、社外資本からトップを迎えて、外からの力で「変わった」とか。それが、その組織にとって本当に望ましい形への変化だったのかは、分かりません。

「オー人事、オー人事」(某人材派遣会社CM)

やりたいことができないこと、変えるべきことを変えられないことを、環境のせいにしていないか? このCMは、「上司や部下、職場に恵まれなかったら、当社に電話して」という内容なのですが、「図書館員」であろうとするなら、いきなり人材派遣会社に登録して転職を図る、ということは、たぶんないと思います(笑)。ならば、現状でよしと割り切るものでなければ、自分から現状を変えるしかないはず。ところが、「上司が決めることだ」とか「先生に言われたら対応しよう」というように、いつのまにか「指示待ち症候群」に陥っていないか、反省するところがあります。気が付いたら、自分自身が「オー人事」コールをされないように。

「宅〇便、一步前へ」(某宅配便会社CM)

私は今、京都大学に在籍していますが、京都大学の図書館の課題として、「図書館が分散していて、学生・院生さんが使いにくい」、「図書館に資料が少ない」、「図書館が主体的にマネジメントできない」等々のことが言われます。ところが、過去の図書館員の文章を読むと、同じようなことは、何十年も前から言われているのです。もちろん、今の図書館のあり方に、それぞれ意義があるのは言うまでもありません。しかし、図書館員が常々言っている、利用者が本当に使いやすい図書館に、そもそも本気で、自らなろうとする気があるのでしょうか?とは言うものの、自身に何ができていないのか、反省するところがあります。

さて、大学図書館を巡る、近年のそしてこれからの様々な変化にあたっては、「きっとこれまでと変わらない。今のままでよい」とも言えますし、一方、「よりよい図書館に、一步近づくチャンスが来ている」と考えることもできるでしょう。そこで、絵に描いた餅になりがちな「新年の抱負」ではありますが、コピーの拝借ついでに、まずは言ってみたいと思います。「図書館、一步前へ」。

呑海沙織(京都大学)	担当: 全国委員、研究企画、支部報編集・印刷
------------	------------------------

去年は、「ただ前を向いてひたすら走る」ような一年でした。一度立ち止まると二度と前に進めなくなるような、そんな気すらして。

先日、『英国オックスフォードで学ぶということ』*を読みました。12世紀から続くアカデミズムに触れた著者の心に、「ものを書く」魅力の灯火を燈したのは、下記のような会話だったそうです。

(英国で自費出版したランコ・ボン氏が)

「なんで、私が自費出版までして本にするかおわかりですか？」と言うので、

「さあ、なぜでしょう？」ときくと、

「本にすることによって、この国(英国)では自動的に五つの図書館に所蔵されるのです。そうすれば、いつか、何百年かの後、誰かがこの本を手にとるかもしれない。私はその人と交信することができる。だから、私はどうしても本にしておくのです」

時空を越えて人と交信する場を提供する図書館で働くことの喜びと、何百年、何千年という時間軸の中で自らが過ごす時間の短さに、改めて慄然とする思いがしました。

京都支部には今期、図書館員一年目の進藤さんと辰野さんが支部委員として加わって下さいました。新しい視点でこれからの道を拓いて下さるものと、期待でいっぱいです。また引き続き、すばらしいデザイン力をお持ちの井上編集委員長、感度のいいアンテナをお持ちの赤澤さんと、編集及び企画を担当させていただくことになりました。「短い時間」をどう充実させるか、どう還元できるのかという観点から、今年も編集及び企画に励みたいと思います。

「今年はペースを落として少しゆっくり」と書きたいところですが、やっぱり「走る」と思います。ただ今年はまだもう少し、周囲に目を配りながら。

* 小川百合。英国オックスフォードで学ぶということ。東京、講談社、2004

京大図書館史こぼれ話 その七

京大初代図書館長島文次郎博士と「老いらくの恋」事件

廣庭 基介

部外者による島樫乃夫人の人物評（前号よりつづく）

同夫人（廣庭注：島樫乃夫人のこと）は和歌山県人で京都女専国文科第二回卒業生でかなり晩学であったが、篤学力行の女性で、当時難関とされていた文検を受験合格して、開校草創期の京都女専国文科の名を揚げた数人の女子学生の中の一人である。京都女専付属の高等女学校の教諭として勤務していたが、気立てのやさしい、面倒見のよい女性であった。書生上がりのわたしなど、職員室の内外で何くれとなく随分お世話になった。その反面専門の国文学の研究にもうちこまれ師について勉強をつづけていたようである。吉沢（注 1）、澤瀉（注 2）、能勢（注 3）、穎原（注 4）、阪倉（注 5）諸先生が女専教授室に出入りしておられたので、常時接触の好機に恵まれ、探究心の旺盛な樫乃さんにとっては、うってつけの環境におかれていたとすることができる。作歌、俳句にも心を寄せ、短歌は川田順に、俳句は荻原井泉水^{せいでんすい}について学び、教養を高め趣味を豊かにすることにも心掛けていたようである。

その樫乃さんが、どんなご縁で島博士夫人となられたか、そのくわしいいきさつは知る由もないが、（中略）銀閣寺隣のお宅へも再々お訪ねするようになり、お二人はご結婚後も、先生お一人で、あるときはお二人で、いつものように「散歩のついでだよ」といわれてよく宮前の茅屋にお寄りになった。（中略）

（注 1）吉沢義則博士のこと。大正8年～昭和11年京大文学部教授、昭和16～25年まで京都

女専、同大學教授。(注 2) 澤瀉久孝^{おもだかひさたか}博士のこと。昭和 11 年～26 年まで京大文学部教授、その間、昭和 17～22 年まで附属図書館長、昭和 26 年～43 年まで京都女子大教授。(注 3) 能勢朝次という京大文学部国文学科を大正 12 年に卒業した人が卒業生名簿に出ているが、その人を指すのかどうか、不明である。(注 4) 頼原退蔵博士のこと。大正 10～14 年まで京都女専教授、昭和 23 年 8 月 30 日京大文学部教授、同日死去。(注 5) 阪倉篤太郎三高教授のこと。三高退官後、昭和 18 年～39 年まで京都女専、同大學教授、図書館長を歴任。

【p. 31: 今年の春の一日、朝餉の終わった後、食卓を中に対座していた山妻が読みさしの新聞をわたしの前に差し出して、

-----京都女子大の古い卒業生、中西まり子さんという方知っていますか。石川県の-----と話しかけた。更に言葉をつづけて

-----とても名文ですよ、「ひととき」の欄です。島先生の奥さんの思い出を書いてあるんです。あの方はほんとにやさしいいい方だったので、いつまでも学生から慕われているのでしょうね-----

わたしは何を措いても早くこれを読みなさいと促されているように思えて、箸をおいて新聞を受けとった。山妻のいうのは、朝日新聞の女性向きコラムの「ひととき」に加賀市の中西まりさんが投稿された「笹だんごに恩師をしのぶ」という標題の文である。わたしは、中西さんが、彼女の恩師島煤乃さんの面影を心に描きながら追懐の慕情をペンに託して書かれた文を繰り返し読んだ。山妻もその行間に温かさのこもる達意流麗の文を読んで感動したのであろう。そして、わたしは何よりこの師弟の間に通う心の交流の尊さに胸うたれ、山妻にすぐ返す言葉はなかった。

(中略) 中西さんが、雨上がりの一日、山に笹の葉をとりに出かけ、初夏の上の香りに、京都での学生時代の思い出がよびさまされ、ペンを執ってこの文を書かれたものだろうと思う。中西さんが、平安文学の講義を受け持っておられた島煤乃先生のお宅を訪ね、終戦直後のまだ豊かに食糧の出回らなかつた時期に、お手製の笹だんごをご馳走になったことが心に浮かんで、切り集めた笹の葉を持って山から帰った彼女は、その心のほとぼりの冷めないうちにこの一文を綴ってこう書かれている。(次号へつづく)

ひろにわ もとすけ (元京大図書館員)

◆◆◆会費納入のお願い◆◆◆

春寒の候、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。毎号、大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしていますが、残念ながら会費の納入率は依然として思わしくない状況にあります。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。既に新会計年度に入っていますので 2003 年度の会費納入をお願いします。

またすでに 2002 年度 (大図研会計年度 2002. 07～2003. 06) は終了していますが、納入率は六割程度です。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 dtkk@rg7.so-net.ne.jp までお願いいたします。